

目的　前報において市販の皮革工芸用染料（アルコール可溶性含金属酸性染料 14 種，塩基性染料 11 種）の染料溶解温度，濃度の適正を検討しさらにこれらの染料を使用して実際の工芸皮革素材に染色し不良といわれている耐光，摩擦の堅ろう性について検討し報告した。今回は引き続きレザー染料について実験を試みた結果について報告する。

方法　供試染料：市販皮革工芸用染料（レザー染料 13 種）。供試皮革：成牛革（タンニン鞣，厚さ 1.5 mm），成牛白革（合成タンニン鞣，厚さ 1.6 mm），供試皮革はバット部より裁断。試験方法：　○染料溶解性・・・IUF 201 法による。溶媒は水，30%酢酸で行った。○溶解性の判定・・・肉眼によりロ紙上に滴下した染料溶液の拡散，乾燥状態を判定。○革の染色方法・・・刷毛引法により濃色（20回引染），淡色（5回引染），染料濃度は最適溶解濃度，染色堅ろう度試験・・・JIS-L-0849⁻⁷¹ 摩擦に対する染色堅ろう度試験方法，JIS-L-0842⁻⁷¹ 耐光堅ろう度試験方法。

結果　染料の溶解性（水による試験）は、橙，赤紫が特に悪く他の染料溶液は濃度 1～5%で均一に溶解した。また水で難溶解の染料は、30%酢酸を適量加えると溶解性が改善されることが判り溶解温度は、60℃が最も良かった。堅ろう性の耐光試験は、成牛革，成牛白革とも赤，青味赤，紫，緑，黒が非常に悪く摩擦試験では、濃色，淡色とも赤紫が特に不良で染色革にエナメル（仕上げ剤）を塗布する事により摩擦に対する色落ちが大きく緩和される事が判った。